大妻女子大学紀要―文系―　第四十二号、二〇一〇年三月

女が男に物を返す時

――平安和歌にみる離婚・離縁――

倉田　実

はじめに

平安和歌を読んでみると、女が、自分の家に置いてあった男の持ち物を、男のもとに返すという内容の詞書があって歌が置かれるケースがまま見られる。このケースでの男女は、愛情関係か婚姻関係にあったとみてまず間違いない。平安貴族社会においては、正式の結婚でも、当初は妻の家に夫が通い、愛人関係の場合でも、男が女の家に通うことでその関係が継続されており、男女それぞれに家があった。そして、男女関係が進展するとともに、男は自分の持ち物を女の家に置くようになっていく。女側で、衣食住の世話は基本的にされたようだが、それでも愛用の物や大切な物、あるいは、普段使いの物などは、運び込んでいた。男の持ち物が愛情の確認と継続を意味したのである。(1) 冒頭に示したケースは、こうして女の家に持ち込まれていた男の持ち物を、男の家に戻すという場合であった。

この場合、男が返送を願う時と、女の判断で返送する時があり、前者で、男がなぜその持ち物が必要なのかが明示されていれば問題はないが、単に返送を願うことだけが記されていれば、その理由を考えなければならない。後者でも、なぜ返送するのかは問題である。言葉を換えれば、男の持ち物がなぜ移動されるのか、持ち物の移動は何を意味するのか、ということである。

結論的に示せば、このケースは、だいたいにおいて離婚や男女関係解消を果たす時となる。男の持ち物が女の家に移動することは、結婚や愛情関係の継続を意味し、逆に、女の家から男の家に戻される時、それは離婚や男女関係解消を意味したのである。男の持ち物は、愛情関係のありようによって、移動を繰り返すのであった。

平安和歌の個々の注釈書において、こうしたケースに離婚や男女関係解消を指摘するものが見られる。特に、佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈』（東宝書房、一九五九・六）の五八四番歌の《余釈》には、以上のようなことがすでに述べられていた。しかし、単に移動が示されるだけの時は、その理由を指摘されないこともある。また、事例が他にどれだけあるのかも明確ではない。そこで、男の持ち物が女の家から返送されることを詠んだ歌の収集整理をしながら、改めて離婚や男女関係解消が理由になっていることを指摘していきたい。今回の範囲は、『古今集』から『後拾遺集』までの勅撰集と、三代集あたりまでの私家集にしぼることにする。以下は、わずかな例になるが、平安貴族の離婚・離縁を考える際の史料ともなろう。和歌の本文は、『新編国歌大観』によった。

一　勅撰集から

最初に、持ち物が男のもとに返されても、離婚や男女関係解消にはならない場合があることを確認しておきたい。

女のもとに衣を脱ぎおきて、取りにつかはすとて
鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣しほなれたりと人や見るらん
（後撰集・恋三・七一八・藤原伊尹）

この歌の場合、男が脱いでおいた衣を女の家に取りに行かせたということなので、離婚ではなさそうだし、『一条摂政御集』では、取りにやった理由が示されていて、返歌の内容からも明らかである。

翁、この女のもとに衣を忘れて、取りにやるとて
鈴鹿山伊勢をの海人の捨て衣しほたれたりと人や見るらん
とて、とく給へと言ひてはべりければ、返りごとに
我が為に馴るるを見れば捨て衣しほたれたりと見る人もなし
（一条摂政御集・三五、三六）

これによれば、男（翁）は、女の家で脱いでいたのを忘れて、取りにやらせたことになっており、逢瀬があったことを暗示していよう。自分が忘れた衣を、海人が漁をする際に脱ぎ捨てておく「捨て衣」にしているが、これは自分の物を卑下しているのであり、「しほなれたり」「しほたれたり」のどちらの本文をとったとしても、女との馴染んだ関係を言っていよう。前者は「馴れ」、後者は「潮垂れ」で逢瀬の涙を指している。また、女の返歌も、「我が為に馴る」を初句に据え、着馴れて濡れた衣を、逢瀬の涙のせいと見る人などいませんよ、と皮肉で応じているものの、馴染んだ男女関係を肯定的に詠んでいる。ここに男女関係解消を読み取ることは困難であろう。

物を返すとしても、こうした例があり、注意が必要となる。ここでは、こうした例を除いての整理になることをお断りしておきたい。以下、この節では『後拾遺集』までの勅撰集から例歌を見ていくが、持ち物には、男からの文（消息）も含め、同歌が私家集にある場合は引用のみとし、二節以降で触れることにしたい。まずは、『古今集』で、文を返す例になる。

(1)　右大臣住まずなりにければ、かの昔おこせたりける文どもを取り集めて、返すとてよみて贈りける
頼めこし言の葉今は返してむ我が身ふるれば置き所なし
返し
今はとて返す言の葉拾ひおきておのがものから形見とや見む
（古今集・恋四・七三六・藤原因香／七三七・源能有）

男からの文をまとめて返そうとした際の贈答歌である。男から来た文を返すのも、離婚や男女関係解消の際に行われていた。右大臣源能有が、藤原高藤女の典侍因香の家に通い住むことをしなくなったので、因香は能有から贈られていた文をまとめて返し、自ら関係に区切りをつけようとしたことになる。関係終焉をこうした行為で表すわけである。

女の贈歌は、年老いた身の置き所もなく、頼みに思わせた文を置く意味もなくなりましたのでお返しします、としているので、関係が途絶えたのは、年齢的なものも絡んでいたようである。「頼めこし」との措辞は、どこか未練も感じられよう。

男の返歌には、いたわるような趣もある。今はもうこれまでとお返し下された文を、自分が書いたものながら、あなたとの思い出の品と見ることにしましょうか、としたのは、いたわりであろう。男は、自ら通いをやめたようだが、女の行為を素直に受け止めて、納得したことであろう。文の移動が、離縁を意味する例となる。

(2) 守(まも)り置きて侍りける男の、心変りにければ、その守りを返しやるとて

世とともになげきこりつむ身にしあればなぞや守りのあるかひもなき

（後撰集・恋三・七六一・伊衡の女今君）

男が置いていた御守りを返そうとした際の女の歌である。男が、女のもとに、御守りを置いていたが、心変わりしたということで、返そうとしたのである。「守り」は、仏具や刀などの場合もあるが、ここは木にまつわる縁語仕立ての歌になっているので、木製の護符であろう。それを女のもとに置くことで、その身の安全を念じたのである。歌ではその御守りを「や守り」に「山守」を掛けて詠み込んでいる。女は、世とともに、嘆きが凝り積もる我が身ですので、御守りがある効果もないことです、としている。「嘆き」のもとは男の心変りであり、そのために御守りが役立たなかったとして返しているので、これは女側からの関係解消を表明したものとなる。

(3) つらくなりにける男のもとに、今はとて装束など返しつかはすとて、

今はとてこずゑにかかる空蟬のからを見むとは思はざりしを

返し

忘らるる身を空蟬のから衣返すはつらき心なりけり

（後撰集・恋四・八〇三・平長興が女／八〇四・源巨城）

男の装束を返そうとした際の贈答歌である。ここの「装束」は、男が女の家に置いていたものであり、通い住んでいたことになる。しかし、男は冷淡になってしまって、通っては来ない。女の贈歌では、「梢」に「来ず」を掛け、「空蟬のから（蟬の脱殻）」を、着る人のない衣装の例えにしている。今はもうお訪れはないということになって、蟬の脱殻のようになったあなたの衣装を見ようとは思いませんでしたと、不実をなじっている。女の方で自ら見切りをつけ、男の装束を返すことで、関係を断とうとしたのである。片桐洋一『新大系　後撰和歌集』には、「通っていた男が来なくなって夫婦の関係を解消する場合は、男の衣裳や持ち物を返すのである」としている。

男の返歌の方は、その常套として、自分が原因であったとしても、女のせいにして詠むことになる。忘れられてしまった我が身に、衣まで返すのは何と冷たい心でしょうとするわけだが、忘れたのは男であることは確実である。関係解消を承諾してのあてこすりなのである。

(4) 整、離れがたになり侍りにければ、留め置きたる笛をつかはすとて

濁りゆく水には影の見えばこそ葦迷ふ江を留めても見め

（後撰集・恋六・一〇二三・よみ人しらず）

男が置いていた笛を返そうとした際の女の歌である。整は、嵯峨源氏である。男との関係が、終わりそうになったので、女が置かれていた笛を返そうとするのであり、(2)(3)などと状況的には同じである。歌では、「葦迷ふ江」に「笛」を隠している。初句「濁りゆく」は、工藤重矩『和泉古典叢書　後撰和歌集』が指摘するように、同義語となる「澄まず」から「住まず」を導いて「離れがた」になったことを意味していよう。二人の仲は終わりそうですが、もしだんだんと濁っていく水にあなたの影が映るようでしたら、葦の繁る中を迷うように流れる入江を堰き留めてでもして見ようと思います、でも、影も映らず、あなたはお姿を見せてくれませんので、笛は留めておかないでお返しします、となろう。「離れがた」と明示されているので、男の持ち物の笛を返すことは関係解消を意味し、それを歌に詠んだのである。こうなる以前は、「留め置きたる笛」とあるように、男は女の家に自分の分身ともなる笛を置いておき、愛情の継続を確認させていたことになる。しかし、関係の終息を見込んだ女は、自ら笛を返して解消を宣

女が男に物を返す時

言したのである。

(5) たまさかに通へる文を乞ひ返しければ、その文に具してつかはしける

やれば惜しやらねば人に見えぬべし泣く泣くもなほ返すまされり

（後撰集・雑二・一一四三・元良親王）

→Ⅳ『元良親王集』

(6) 左大臣の、土御門の左大臣の婿になりて後、襪（したうづ）の型を取りにおこせて侍りければ

年を経て立ち馴らしつる葦鶴のいかなるかたに跡とどむらん

（拾遺集・雑上・四九八・愛宮）

男が、女の家に置いていた襪の型を取りに来た際に詠んだ、女の歌である。「襪」は、束帯着用時に靴の下にはく足袋のようなもの、「型」は、縫う時の下型であり、男用の物である。『大鏡』公季伝に、康子内親王が師輔のために、「小さき御唐櫃一具に、片つ方は御烏帽子、いま片つ方に襪を、一唐櫃づつ、御手づからつぶと縫い入れさせたまへりけるを」（新全集・二三四頁）とあり、襪自体は、妻が縫うものであった。

詞書は、左大臣道長が、土御門左大臣源雅信女倫子の婿となった後、源高明女明子のもとに襪の型を引き取りに使いを寄こしたので、明子の母愛宮が詠んだ歌となろう。詞書をこのように解するならば、道長は、明子と関係した後に倫子を妻とした史料となる。『台記別記』（第三）に拠れば、永延元年（九八七）一二月一六日に道長は彰子と結婚しているので、それ以前となる。当時の道長は、従三位左京大夫であった。詠者は、安和の変（九六九）以降の消息がよく分からない愛宮ではなく、明子自身とする説が妥当かもしれない。

この歌は、倫子と結婚した道長を難じたものと解する説が多いが、それよりも明子の道長との関係を案じたものとなろう。それは、襪の移動からはっきりする。道長は、それを明子の家に置いていたが、引き取って倫子の家に置こうとしたことになる。男の持ち物が、正妻のもとに移動したのであり、明子の方ではその事態に将来の不安を感じたのである。この移動で、すぐさま離婚という事態にはならなかったが、明子側では、その危惧があったことであろう。

歌は、葦鶴に夫をよそえ、馴れ親しんだこちらから離れて、はたしてどのような所に落ち着こうとされるのかとして、夫への不安をいい、見放された悲しみをいうわけである。なお、詞書にあった襪は、「あしたづ」に隠されているのであろう。「したぐつ」が「したうづ」になり、ウ音が表記されずに「したづ」になると思われる。

(7) 国用がむすめを、知光まかり去りて後、鏡を返しつかはすとて、書きつけてつかはしける

影絶えておぼつかなさのます鏡見ずは我が身の憂さも知られじ

（拾遺集・恋四・九一五・藤原国用女）

→Ⅰ『仲文集』

(8) 男に忘られて装束包みて送りはべりけるに、革の帯に結びつけはべりける

泣き流す涙に耐へで絶えぬれば縹の帯の心地こそすれ

（後拾遺集・恋三・七五七・和泉式部）

→⑤『和泉式部続集』

(9) 忘れじといひ侍ける人の、離れ離れになりて、枕箱とりにおこせてはべりけるに

玉櫛笥身はよそよそになりぬともふたり契りしことな忘れそ

（後拾遺集・雑二・九二三・馬内侍）

→①『馬内侍集』

⑽　年頃住みはべりける女を、男、思ひ離れて、物の具など運び侍りければ、女のよめる

嘆かじなつひにすまじき別れかはこれはある世にと思ふばかりぞ

（後拾遺集・雑二・九二八・読人不知）

男が持ち物を運び出していく際に女が詠んだ歌である。男の方では、永年通い住んできた女に対する愛情が薄れ、「物の具（調度品）」などを運び出しているとされるので、もう女の家に訪れないという意志表示になる。歌は、贈歌というよりも、独詠歌の趣であり、男が関係解消をはっきりさせようとしている事態を、自ら納得させようとして詠まれている。「嘆かじな」の初句切れは、嘆くまいとするさびしい断念であろう。この事態は、誰もが避けられない死別ではないのだ、これは生きての別れと思うばかりのことだとして、悲しい事実を諦め、乗り切ろうとしている。永年馴れ親しんだ男との関係に未練を残すのである。

この歌は、よみ人知らずになっているが、藤本一恵『後拾遺和歌集全訳注』（講談社学術文庫、一九八三・七）に拠れば、「太山寺本」の勘物に「実威儀師仁満妻」とあるとのことなので、女の家は、僧が京近辺に持っていた車宿のように使われていたのかもしれない。

⑾　師賢朝臣もの言ひわたりけるを、絶えじなど契りて後も、また絶えて年頃になりにければ、通はしける文を返すとて、その端に書きつけてつかはしける

行く末をながれて何に頼みけん絶えけるものをなか川の水

（後拾遺集・雑二・九六六・式部命婦）

⑴と同じく、文を返すことで、女側から男女関係に決着をつけようとした歌である。絶えることのない愛情を約束した後も、訪れが絶えて何年にもなっている。三年所在不明なら離婚とされた時代なので、「年頃」はこれくらいの年数であろう。そこで、贈られた文を返すことによって、関係を清算しようとしたことになる。これまでに贈られた男の文には「絶えじ」との約束事が多かったのであろう。しかし、男の不実によって、すでに「仲」は「絶え」てしまっている。行く末まで契りが続くとどうして頼りにしていたのであろう、中川の水が絶えたように、二人の仲は、すでに絶えていたのだ、と後悔も先立つのである。文を返し、後悔の念を言うことで、関係解消の意志を伝えたことになる。

以上が、『後拾遺集』までに認められた、男の持ち物の移動が、離婚や男女関係解消とかかわる例であった。まとめは最後にまわすことにして、続いて私家集をみていきたい。

二　男の私家集

ここでは、男性の私家集に見られる事例をみることにし、女性のものは次節で扱うことにする。便宜の処置である。

Ⅰ　婿の知光絶えて、置きたりける物の具ども運ぶに、鏡の留まりてありける、やるとて

影絶（ふち）えておぼつかなさのます鏡見ずは我が身の憂きも知られじ

返し、知光

君と我かたみに見むとます鏡そこにとまれる影さへや憂き

（仲文集・三五／三六）

男が自分の持ち物を女の家から運び出した際の贈答歌である。『仲文集』と同歌所収の『拾遺集』とでは詞書に差異があり、前者では男が自分の持ち物を運び出し、取り残されていた鏡があったので女側が返そうとしたことになる。『拾遺集』では「国用が女を、知光まかり

去りて後、鏡を返しつかはすとて、書きつけてつかはしける」とあり、その事情が不分明で、最初に持ち物を返そうとしたのが女側になり、女側からの関係解消の通知となる。『仲文集』の方が真相を伝えているかもしれない。なお、「運ぶ」の主体は男で、鏡が取り残されていたことになる。女側が運び出したのではないのは確かである。

『仲文集』のここは『国用集』が混入した部分であり、先に示した『拾遺集』のように、国用の代作か、その女が詠者であり、いずれにしても女の立場で詠まれている。贈歌の初句は、『仲文集』では「かげみちて」だが、他本や『拾遺集』の「影たえて」が妥当であり、本文を改訂しておいた。あなたの姿が映らなくなって心細さが増すばかりの鏡なので、見なければ忘れられた身の憂さを感じなくてすむでしょうからお返しします、として、女側からも関係解消をいうわけである。鏡が残っていたのは、男が取り忘れたのではなく、女に贈ったものだったので、わざと残したのかもしれない。女は、あえてそうした物であっても、送り返して、自らも関係解消をきっぱりと念じたのであろう。鏡には人の魂が宿って影を映すとされたので、手もとに残るのがつらかったのである。

鏡が男の贈ったものであった可能性は、返歌に認められよう。「君と我かたみに見む」とあるのは、「互み」と「形見」を掛けており、二人で見ようと思った形見の鏡の意が働くので、男持参の物ではなく、贈られていた蓋然性があろう。男は、形見のつもりで鏡を残したのかもしれない。しかし、返却されてきたので、そうした鏡なのに、残っているわたしの影を見るのも忌避なさるのですねと、皮肉で応じている。鏡を見るのもつらいと言われれば、こうした皮肉でしか応える方途はないであろう。

Ⅱ　重輔が懸想し侍りける女のもとに、笛を置きて、取りにつかはすとて

笛の音に泣きてうらみし葛の葉を吹きかへさなん木枯の風

（元輔集・二一〇）

女の家に置いていた笛を、男が取りに行かせた際の代作の歌である。本文に乱れがあるようであり、後藤祥子『元輔集注釈』（貴重本刊行会、一九九四・一一）の書陵部蔵甲本により、初句「ふえのねか」を除いて改訂した。歌が詠まれた状況が把握しにくく、顕忠男重輔と女との関係や、元輔がなぜ代作したかが分かりにくい。重輔と女との関係は、笛を置くぐらいなので逢瀬がまだとも思われないが、愛人関係が継続しているのか、あるいは、終わろうとしているのか、いずれとも理解できるようである。「笛を置きて」にしても、笛を置き忘れての意とも、笛を置いておいての意ともとれる。また、「取りにつかはす」理由もわからない。他で使用するためか、関係を断つためか、両様のケースが考えられる。

歌の措辞からすると、「裏見」と「怨み」の掛詞が伴う「葛の葉」が使用されて怨情が示唆されているので、終わろうとする関係のようである。歌の意は、笛の音に添えて泣いてあなたの薄情を怨んだことです、裏を見せて葛の葉を吹き返す木枯しの風のように、どうぞ笛をわたしに吹き返してください、となろうか。笛を返送してもらうことで懸想を断念し、破局をいうものとなる。このことを体よく伝達したい重輔のために元輔が代作したことになろうか。単に置き忘れていたのを返送してもらうには、やや手がこんでいよう。

Ⅲ　忍びたる女の、包の忘れて侍りけるにつけてつかはす

打ち解けて思はぬ事は世とともに人めつつみもわびしかりけり

（元輔集・二三七）

Ⅱに続いて『元輔集』からになり、忘れ物の「包」を返す際の歌である。「包」の中身は、衣装であろう。後に引用する、⑤に「装束ども包みて置く」とあるのが参考になる。

ここも本文の異同が多く、主語が明確にし難い。書陵部蔵甲本では次のようになっている。

忍び侍りける人の、包の忘れて久しくなりにけるを返すとて

打ち解けて思はぬ仲は世とともに人めつつみも久しかりけれ

底本の歌仙家集本と書陵部蔵甲本を併せて考えると、包みを忘れたのはどちらか、歌を詠んだのは誰かをめぐって三通りの解釈が可能である。四通りにならないのは、女が忘れて、女が詠んだことは考えられないからである。『元輔集注釈』は「当時の慣習からみて、歌を詠んだのも包を忘れていったのも元輔、と考えたいところである」としているが、女が返す時にも詠歌があることは見てきた通りである。女の歌とすると元輔の歌が家集で脱落していたことになろう。また、男女関係にあって、忘れたとある場合は、男が持ち物を女の家に忘れたととるのが実際的なので、女が忘れたのではないだろう。したがって詠者の問題になる。しかし、ここは女の歌か、男の歌かは、決め難いと思われるので、両様に解しておきたい。

いずれにしても、男が、忍びの関係にある女の家に、衣装の包を持ち込んだまま置き忘れていて、それが返されてきたということは動かない。そして、単に忘れ物が返された折の歌でもない。返すことで「忍び」の関係を解消しようとしたと考えるべきであろう。

これを女の歌とすると、打ち解けて思ってくださらないことは、この包ではありませんが、いつまで経っても人目慎(つつ)みをしているのも、わびしいことでした、となろうか。女は、忍びの関係で、打ち解けてくれず、人目を気にする男を諦めて、包を返すことで関係を解消しようとしたことになる。

逆に、男の歌とすると、打ち解けて思わなかったのは、この包ではないが、いつまで経ってもあなたが人目慎みをしているのがわびしかったからです、となろう。二人の仲に終止符を打ちたい女に同調しながら、忍びの関係を強いた女のせいとするのであろう。

男女どちらの歌かに問題を残すが、男の持ち物の移動が言われることで、男女関係の解消が意図されていることは確かと思われる。

Ⅳ　先々通はせ給ひける御文とても、今は返したてまつれたまふとて、

御息所

やれば惜しやらねば人に見えぬべし泣く泣くもなほ返すまされり

（元良親王集・六六）

男からの文を返そうとした際の女の歌である。前節で示したように、『後撰集』では「たまさかに通へる文を乞ひ返しければ、その文に具してつかはしける」との詞書で、詠者は元良親王となっている。この詞書では、まず女の方から男への文の返却を求めてきたことになるが、このケースはあまり見られない。また、男が女に文を返さなくても、男側で「人見えぬべし」と危惧することは想定しにくいので、詠者は女で、『元良親王集』の形で考えるのが妥当である。女は、宇多天皇の京極御息所褒子であり、元良親王との密通は、世間に知られていた（後撰集・九六〇）。

女は、以前にお通わせになった御文であっても、今はお返しいたしますとして、歌を詠んでいる。男の文は、破いて棄てるには忍びがたく、破かずに手もとに置いておけばきっと人に見られてしまうでしょう、泣く泣くであっても、やはりお返しするのが一番いいようです、としている。形見となる文を手もとに置きたいのはやまやまだけれど、文が散るのを恐れて、返却するというのである。返却の理由は「人に見えぬべし」になるわけだが、自ら返そうと判断するのは、愛情関係を解消しようとしていることになる。男に未練を残しつつ、もう逢ってはならないと自らに言い聞かせるようにして、世間から身を守ろうとしているのである。文の返却は、関係解消を意味すると考えるのが当然となろう。

Ⅴ　はやうのことなるべし。北の方と怨じたまて、さらに来じと誓言

して、物ども払ひなどして、二日ばかりありて
別れては昨日今日こそ隔てつれ千代しも経たる心地のみする
御返り
昨日とも今日とも知らず今はとて別れしほどの心まどひに
（一条摂政御集・一〇一／一〇二）

離婚と和解が共に示される贈答歌である。北の方恵子女王との夫婦喧嘩で立腹した伊尹は、もうこの家には来ないと宣言して「物ども払ひなど」している。自分の持ち物となる調度を引き払ったのである。離婚を思いきったからに他ならない。しかし、二日ほどして和解を申し入れている。別れて、昨日今日と二日隔たっているが、千年もたった気ばかりがするとして、独りでいる辛さを訴え、仲直りを願ったのである。

これに対して、北の方は、自分の方は、昨日のことか今日のことかも分かりません、別れた折の悲しみで気が動顛したままですのでとして、別離解消をほのめかしている。これで両者は和解したことになる。「はやうのことなるべし」とされているように、若気の短気が原因なのであろう。夫婦喧嘩のことは、『一条摂政御集』一八四番歌にも認められるが、二人の間には、親賢・惟賢・挙賢・義孝・義懐・懐子の六人の子が誕生しており、離婚するぞという短慮がありつつ、すぐに和解する睦まじい関係であったろう。この贈答歌は、『新古今集』（恋四・一二三七／一二三八）に収載されている。

Ⅵ　言ひわたりし女の、とみに聞きげ(こ)もなかりしかば、文返し得てんと言ひつかはして
言ひそめし言の葉いかがなりにけむ吹き返さなんあきの山風
（兼澄集・七八）

求愛を自ら断念し、懸想文の返却を求めた男の歌である。底本詞書の「とみにきしけも」では意が通らないので、他本により改訂した。「聞きげもない」で、求愛を受け入れてくれそうにもないことを言う。求愛は、「言ひわたりし」とあるので、たびたびに及んでいたが、聞き入れてくれそうにもないので、これまでの文を戻してほしいと言うのである。歌は、この事情を詠んでおり、思いを込めて書き記してきましたわたしの文は、どうなっておりましょう、秋の山風が紅葉に染めた葉を吹き返すように、「飽き」ているでしょうから、どうぞお返しください、となろう。男が返却を願うのは、文が散り、浮名が立つのを防ぐとともに、もう求愛はしませんとの宣言になるが、最後通牒を突きつけるようにして、さらに女の反応を見ようとしたのかも知れない。

Ⅶ　人のもとに枕を置きて、来ずなりにければ、返すとて
おきてみるかひもあらまし忘るるをこれだにつげの枕なりせば
返し
かくなむとつげの枕にあらずとも知らざらめやは恋の数をも
（実方集・一四六／一四七）

女が、男の枕を返そうとした際の贈答歌である。男は女の家に枕を持ち込んでいたので、通い住んでいたことになる。しかし、男の足は間遠になってしまった。そこで、女は枕を返すことで、男との関係を清算しようとしたのである。置いておいて朝起きて見てみるかいもありましょう、せめて忘れられたこの枕が恋心を告げる柘植の枕でしたら、として、戻し返す理由とするのである。「柘植の枕」には、「一人寝る心は今も忘れずとつげの枕は君に知らせよ」（古今六帖五・枕・三二三九）が踏まえられており、恋心を告げるものとされている。また、枕には魂が入るとされていたので、男を表象するものとなるが、通わなくなった現在、物の具の一つでしかない。もし、魂が入った恋心を告げてくれる柘植の枕であったなら、手もとに置いておく甲斐が

あろう。しかし、そうではないのである。「告げの枕」であったらいいのにとするところに女の未練がほの見えていよう。

男の返歌では、「我が恋を人知るらめや敷妙の枕のみこそ知らば知るらめ」（古今集・恋一・五〇四）が踏まえられている。枕は恋の睦言を知っているという歌であり、当時の俗信であった。こんなにも思っていると告げる柘植の枕でなくても、あなたへの恋の数々を、わたしの枕が知らないことがありましょうか、として、共寝した枕であることを強調している。告げの枕でなくても、共寝した枕は、自分の恋心を知っていると主張し、居直っていよう。開き直りをはかることで、自身の非を糊塗しつつ、関係解消を納得したのであろう。

Ⅷ　ある男、夏、女のもとに扇を落として、その後絶えて音もせねば、

返しやるとて

忘れけるほどさへ今は思ほえず扇を見れば夏にやあるらん

（嘉言集・三六八）

落ちていた男の扇を返そうとした際の女の歌である。男と女の関係は、仮初のものであったかもしれない。夏の逢瀬以降、訪れがないので、落し物の扇を送り返したのである。これは、単に落し物を届けるというケースなのではなく、通って来ない男の持ち物を返すことで関係解消を通知するものとなる。あなたに忘れられてどれほど時が経ったのかさえ、今ではは っきり分かりませんが、扇を見てみると、以前に来られたのは夏だったではありませんか、として、訪れのなさを指摘し、難詰するのである。

男が女のもとに落し忘れていた扇は、夏なので夏扇の蝙蝠（かはほり）扇となる。当時は、冬扇の檜扇と季節に応じて使い分けており、女が「夏にやあるらん」としているのは、すでに冬扇を使う秋以降になっていることを表している。季節が変わるまでになっていることを言うわけであり、さらにここには、『文選』怨歌行の、班婕妤の故事が念頭にあろう。

女が男に物を返す時

当時知られていた、漢の成帝の愛妃班婕妤が、飛燕のために帝寵を失い、夏の白絹の扇が秋になって捨てられることになぞらえて我が身を嘆いたという故事である。男の持っていたのが白扇かどうかは、分からないが、「夏にやあるらん」には、「忘れける」と呼応して、捨てられた扇であることを含意していよう。わたしは、秋になって捨てられる扇と同じなのですね、としていることになる。扇とともに班婕妤の故事を踏まえた歌を返すことで怨情をいい、関係解消の意を伝えるのである。

なお、返歌があってもよさそうだが、脱落したのだろう。

Ⅸ　十月ばかりに、妹を懸想する人の、ことはなるまじきなめり、文をだに返し得てんと言へるに

木枯の風のゆくてにまかせてし人の言の葉とまらざりけり

（輔親集・七八）

男から懸想文の返却を求められた際に、女の兄弟が代わりに詠んだ歌である。男は、懸想を続けても、恋が成就することはありえないでしょうから、文だけでもお返しくださいと言ってきたので、自ら諦めたことになる。状況は、Ⅴと同じであるが、Ⅸは返す際の女側の歌で、輔親が代作したのである。妹のことは、系図類になく、未詳である。

歌の二句「ゆくて」は、行きがけ、ついで、の意として働いており、男の求愛態度に誠意を認めていないような詠みぶりになっている。すなわち、木枯しが吹くついでに任せていたあなたの文は、葉が木に留まらないように、我が家に留め置かれませんでした、と懸想文を軽いものに見立てている。歌は、あくまでも懸想された妹の立場で詠まれているが、妹の結婚を案じる兄弟の思いも投影されていよう。これで、女側も最終的に求愛を拒否したことになるのである。

三　女の私家集

最後に、女性の私家集である。『馬内侍集』と『和泉式部集』『和泉式部日記』が史料である。

① はじめのやうにもあらずなり侍る人の、寝所に扇を忘れたるを、やるとて

朝まだきあれゆく床に我おきてまた忘らるるならひありけり

（馬内侍集・一八一）

男が置き忘れた扇を返そうとして添えた、女の歌である。逢いはじめた頃の情愛が薄れてきた男が、寝所に扇を忘れたので、わざわざ送り返している。ここの扇にも、Ⅶと同じく班婕妤の捨てられた扇の故事が念頭にあろう。歌は、あなたは朝早々に起きて帰り、早くもさびれゆく床にわたしを置き去りにして、そのうえ扇を忘れたのは、またここに男から忘れられるならわしがあったということでした、となろう。女と扇が重ね合わせられ、班婕妤とその扇のような運命を暗示させたのである。忘れられた扇は、女自身の行く末なのであった。歌からすると、男は早朝に帰っていったようであり、そこにも愛情の不安を感じたものと思われる。

この女の行為と詠歌をどう取るのかは、難しい。男の物を返すということを強調すれば、関係解消を念じたものとなる。寝所で、もう男には愛情がないと判断したことにもなろう。逆に、男の薄情と、女側の悲哀をいうことで、閨怨を仮託した愛情表現ととれなくもない。「はじめのやう」な情愛を念じていることになる。扇には「逢ふ」が含まれるので、逢いたい意を読み取ることも可能である。また、竹鼻績『馬内侍集注釈』（貴重本刊行会、一九九八・七）の「愛の破綻を予感している」歌というような解釈も可能だろう。しかし、破綻の予感を詠むことで、どうしたいかについての指摘はない。とにかく、正反対の解釈が可能だが、ここは忘れ物を返し、班婕妤の故事を連想させることで、自ら関係解消を示唆した歌と解しておきたい。

② いみじきことありともよそよそにならじと契りける人、さしもなくなりて、置かせたる手箱をさへに乞ひにおこせたれば、やるとて

玉櫛笥身はよそよそになりぬともふたり契りしことな忘れそ

（馬内侍集・一八六）

男が返却を求めてきた手箱に添えた、女の歌である。『後拾遺集』の詞書と状況的にはほぼ同じだが、取りに来たのが、手箱ではなく枕箱になっている。手箱は三重の懸籠が付く、背の高い箱で、理髪具・香・薬・懐紙・熨斗など様々な物を入れた。『類聚雑要抄』に北廂の具として、長さ一尺二寸五分（約三七センチ）、弘さ八寸（二四センチ）、高さ六寸四分半（約二〇センチ）で、三重の懸籠の内に様々な物を入れた手箱の図がある。やや生活臭があろうか。一方の枕箱は、枕が二つ入れられ、長さ七寸二分（約二二センチ）、広さ五寸五分（約一七センチ）、深さ二寸五分（約七センチ）で、それほどの物は入らない。また、ここは箱型の枕の意でもない。契りを連想させ、歌の内容からしても、ここは枕箱がふさわしいが、以下は、『馬内侍集』で考えていきたい。なお、歌に異同はない。

詞書の「いみじきことありともよそよそにならじ」との契りを、『馬内侍集注釈』は、「二人の関係が深刻な事態になっても他人の関係にはならないという約束事」と解している。「よそよそになる」は、「一日二日のほど、よそよそに明し暮す折々だに、おぼつかなきものにおぼえ」（源氏物語・須磨巻）というように、身が別々になることで、『後拾遺集』の「離れ離れになりて」と同じことであろう。どんなにひどい事態があっても離れ離れになるまいと約束した人が、そう

でもなくなって通わなくなり、置かせていた手箱までも引き取りに寄こしたのである。男は、愛情関係解消を果たすために、様々な物が入る手箱を引き上げようとしたことになる。

こうした仕打ちに対して、女は、お互いの身は別々になろうとも、箱と蓋がぴったり合うように、二人で愛し合ったことは、忘れないでくださいと返している。男の意向を受け入れつつ、未練を残すのである。「玉櫛笥」は男の手箱で「身」を導く枕詞の働きをし、「身」は箱の中身と、身体の意を掛けている。また、「よそよそ」は、箱と蓋が分かれることに、身が別々になることをよそえ、「ふたり」に蓋を掛けている。『馬内侍集注釈』は「契りしことな忘れそ」を、「二人で約束したことを決して忘れなさいますな」としているが、すでにその約束が破られているので、おかしなことになろう。

男は、持ち物を女の家から戻すことで一方的に別離を決定づけたのに対して、女側には愛し合った記憶を大切にしてほしいと願いつつ、従う姿勢を見せたのである。最後の物が返されたので、破局は決定づけられたことになる。

③　人の置きたりける鏡の箱を、返しやるとて

影だにもとまらざりけります鏡箱のかぎりは言ふかひもなし

（和泉式部集・五八四）

男の鏡箱を返そうとして添えた女の歌である。鏡のことはⅠにあった。ここは鏡が入った鏡箱で、女の家に置かれていたのである。返した事情は詞書に示されていないが、「返しやる」に男女関係の解消が意図されていると考えるべきであろう。冒頭に触れた『和泉式部集全釈』の『余釈』は、この歌についてであり、「同棲生活が破たんに陥った時、男の私有品は再び男の手に帰す」としていた。

歌の方には、返す理由が明確に詠まれている。「影だにもとまらざりけり」は、鏡に男の姿さえも留まっていないとする、通いがなくなっていることを強調的に言うことであり、そうした鏡の箱ばかりあっても仕方ないことだとして、返す理由となっている。女から関係解消を通知したのである。

④　手箱置きたるやるとて、同じ人に

あふことを今は頼まぬ仲なれどまだこそ開けね島の子が箱

（和泉式部集・六一八）

男の手箱を返そうとした際の歌である。③と同じ状況で、手箱は②で触れた。また、「島の子」は浦島のことで、その箱を開ける開けないは、「水の江の浦島の子が玉櫛笥開けざらませば妹に逢ひなまし」（古今六帖・五・服飾・玉櫛笥・三一四九）、「夏の夜は浦島の子が箱なれやはかなくあけて悔しかるらん」（拾遺集・夏・一二二・中務）などに拠っていて、箱を開けたら逢えなくなる、後悔する意になる。したがって、箱を開けなかったというのは、文字通りあなたに黙って箱を開けませんでしたと告げるとともに、あなたに逢えなくなる後悔をしたくなかったということになる。あなたと逢瀬を持つことは、今はあてにできない仲となりましたが、それでも逢瀬があるようにと思って、浦島の箱ではありませんが、開けることはしませんでした、となろう。②の男とは違って、まだ未練を残しつつ、関係解消をいうわけである。

⑤　装束ども包みて置く。革の帯に書き付く

泣き流す涙に耐へで絶えぬれば縹の帯の心地こそすれ

（和泉式部続集・二〇八）

装束を包んだ際に、革の帯に書きつけた歌である。これまでの歌は、女の家を舞台にしていたと言えるが、和泉式部の場合には、「いささ怨ずる事ありて、男の家を去るとて、常にする枕に書きつくる」（和

泉式部集・二〇〇）とあるように、男の家に住んでいたこともあった。したがって、この詞書と歌の場合のように、自分が去るのか、男が来なくなるかの判断が難しい場合がある。ここの「装束ども」は、下に「革の帯」とあるので男性用であり、それを包んで整理したのは、自分が去るにあたってか、それとも去る男のためかということである。この詞書のままでは、相手の男の素姓が分からないので、どちらとも決しがたいのである。

一方、『後拾遺集』では、「男に忘られて、装束包みて送りはべりけるに、革の帯に結びつけはべりける」とあり、明確に男のもとに送ったとされている。しかし、あまりにも整えられた詞書をこのまま信じていいのかとも思われる。和泉式部に関しては、住まいの問題が大きいように思われる。なお、佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈―続集編―』（笠間書院、一九七七・一〇）は、和泉式部が家を去る時、「着馴れた品を整理して置いたのではなく、新調して残しておいたのであろう」としていた。仮に女が去ったとするのが妥当だとしても、逆転させて考えると、自分が移動することで、物との関係が絶えるとすれば、参照すべき事例となろうか。

さて、女は歌をわざわざ革の帯に書きつけている。これは、『催馬楽』「石川」を踏まえるからであろう。

石川の　高麗人に　帯を取られて　からき悔する
いかなる帯ぞ　縹の帯の　中は絶えたる
かやるか　やるか　中は絶えたる

異説、「なかはたいれたるか」

女が、包みの中から「縹の帯」を選んだのは、「中は絶えたる」や「からき悔する」を暗示したかったからであろう。「中は絶えたる」は天治本（岩波文庫）の形で、他本は意味未詳の「中はたいれなるか」になっている。ここは、歌句にも「絶え」があるので天治本の形でいいのだろう。男との仲が絶えて、辛い思いをすることになった意を込めたのである。

歌は、泣き流す涙に耐えきれずに、二人の仲が絶えてしまったので、中の絶えた縹の帯が取られたような、辛い思いがすることです、となろう。革の帯に託されて、愛情を残しつつ、離別を決意した女の悲哀が詠まれていよう。

⑥　よそよそになりたる男のもとより、位記といふ物乞ひたる、やるとて

あはれ我が心にかなふ身なりせば二つ三つまで名はも見てまし

（和泉式部続集・二〇九）

位記を男に戻す際に詠まれた歌である。別れ別れになった男から位記の返却が乞われているので、女の家に通い住んでいたことになる。あるいは、同居だったかもしれない。

歌は、位記にちなんで詠まれている。「二つ三つ」は、二位三位のことであり、「名」はそこに書かれる男の名である。ああ、わたしの心のままになる身の上でしたならば、二位や三位になるまであなたの名前を位記に見たことでしょうよ、という意になろう。上の句には、男と「よそよそに」なった身の上が、下の句には軽侮気味だが男の昇進への期待が据えられている。すでに男とは関係は断たれているので、物を返すことに、それほどのこだわりを感じてはいないであろう。逆に、反実仮想の文脈は、男との関係を懐かしんでいるのかもしれない。

⑦　絶えなんと思ふ人の太刀のあるを、やるとて

返せどもこは返されず思へどもたちにし名こそかひなかりけれ

（和泉式部続集・二四九）

太刀を男に返す際の歌である。「絶えなん」の主体は、男とも女ともとれるが、ここは歌の内容からして女と思われる。男との関係を清算しようと思っていた矢先、太刀が置いてあったので、返すことによっ

て、決着をつけようとしたことになろう。四句「たちにし」に「太刀」が詠まれている。

歌は、太刀はお戻ししますけれど、二人の仲はもとに戻せませんよ、いくら思っても立ってしまった浮名はどうしようありませんでしたよ、となじることで、返す意図を仄めかしている。しかし、持ち物の返却には、重い意味が込められるのである。

⑧　なほある枕どに書きつく

かかりきと人に語るな敷妙の枕の思ふ事だにぞ憂き

（和泉式部続集・二六八）

残っていた男の枕に書きつけた歌である。ただ書きつけただけなのか、贈歌に及んだのかは、はっきりしないが、後者の可能性があるのでみておきたい。詞書の「枕ど」は不明だが、枕箱と解しておく。男が通わなくなったあとにも、枕が残っていたのである。ここは、枕が恋の睦言を知る（Ⅶ参照）ということで詠まれている。

こんな女であったと人に語ってくださるな、恋の睦言を知る枕がどう思っているかということでさえ、つらいことですので、として、浮名が立つのを防止したのである。ここの返却は、関係解消後のアフターケアーの意味を持つことになる。

おわりに

以上の二十四事例が、男の持ち物が女の家から返される際の用例であった。返そうとする主体は、女側で十三例、男側で九例である。女側に主導権がありそうに見えるものの、男の不実や薄情が前提にあるので、男性優位の結婚制度であったことは、ここからしても明らかである。しかし、女側では、男の持ち物を返すという形で、男の気儘さに抵抗していたといえよう。ここに結婚をめぐるジェンダー構造が認められるであろう。

持ち物について整理してみると、五例が文であったので、残り十九例が男の持ち物となる。御守りと位記は例外的と思われるので、装束類と調度（物の具）に大別されよう。

調度は、⑽やⅠで「物の具」とあった場合には、唐櫃・大和櫃などの大型な収納具もあったかと思われるが、以上の用例からは分からない。屏障具・座臥具あるいは厨子棚・二階棚などの類が認められず、多くは小型の収納具となる箱であった。手箱・鏡箱などであり、座臥具となる枕も、枕箱があったと見られよう。硯箱・薬箱の類、あるいは当然のことになろうが、整容具・照明具・飲食具・などは女方の物を使用したのであろう。

枕は、直垂衾などと伴に宮中の宿直にも持参されており、宿直物でもあった。女の家から宿直物を運ばせる例も認められるので、枕は共寝を暗示するだけでなく、宿直という公務に実際的な役割があったと思われる。太刀も公務に必要であったし、衣装は当然のものになる。調度以外では、右と重なるが、笛・扇・太刀などの狭義の持ち物であった。

男の持ち運んだ物は、いずれも大きなものではなく、移動が簡単なものであり、大型の調度などは、運ばれなかったと思われる。意外にささやかな物であり、小型のものしか置かなかったと判断される。別稿で触れることになるが、藤原兼家は道綱母邸にほとんど自分の持ち物を持ち込まなかったようである。兼家は、道綱母邸において、すべてそこで用意された物を使用していたことになる。夜離れを嘆く道綱母の悲しみは、兼家の持ち物の不在にも関係していたかもしれない。

兼家の場合は措くとして、ささやかな物であったとしても、女の家に常置することが、いかに大切なことであったのは、以上の用例から確かである。そして、男の持ち物の、女の家からの移動は、関係解消を意味していることも確実である。物は、移動される時、そこに意味を生じるのであり、ドラマを生成するのであった。

注

（1）この点に関しては、別稿「男の持ち物・忘れ物――王朝文学の「通い婚」における愛情の確認――」（倉田実編『平安朝の王権と貴族（仮題）』森話社、二〇一〇・五）を参照されたい。